

一般部門

湯たんぽ

まきの やすこ
【牧野 保子・東京都】



入選

10年前のことである。私は人間ドックでおなかのがんが見つかって、初めての入院、初めての手術をした。がんは、後腹膜から腸にまで浸潤していて、手術は8時間もかかった。病気の時ぐらい1人で休みたいと個室をとったが、術後は、1人でいるとかえって痛みと不安にさいなまれた。入院は、抗がん剤投与も含めて10カ月に及んだ。

担当医は毎日夕方になると立ち寄ってくれたが、彼が帰った後、私は不安が募って毎日のようにおなか痛んだ。痛み止めは決められた回数しか飲めない。ナースコールをすると、すぐ看護師が来てくれた。私の訴えを親身に聞いてくれ、「ちょっと待っててくださいね」と病室を出て行った。当直医でも呼んで来てくれるのだろうか。

戻ってきた彼女は、手に赤いカバーにくるまれた湯たんぽを持っていた。「これをおなかに当ててみてください。きっと楽になります」。その湯たんぽを抱えてみると、ほんのりとしたぬくもりがおなかから全身に広がって、だんだん痛みが和らぐような気がした。

「ありがとうございます。なんだか気持ちよくなりました」。「冷めたら遠慮なく言ってください。いつでも取り替えますから」と、看護師は笑顔を残して病室から出て行った。こんな最新医療を施す病院で、まだ昔懐かしい湯たんぽが活躍しているなんて、思いもよらなかった。彼女は、深夜まで何度も私の様子を見に来てくれた。

医師は、患者の病状の変化に24時間、対応はできない。そんなとき、懸命に患者の訴えを聞き、適切にフォローしてくれるのが看護師だということを、私は入院して初めて知った。看護師は3交代制で、朝昼夜と替わるが、どの看護師も患者の立場に立って、優しくお世話してくれた。「看護師さんは、湯たんぽと同じだ」と、私は思った。10カ月もの闘病生活を乗り切れたのも、彼女たちのおかげだと、今でも深く感謝している。